

# 日本語学習経験が韓国人日本語学習者の 社会的迷惑行為に対する認知と注意行為に及ぼす影響

林炫情（山口県立大学）・玉岡賀津雄（名古屋大学）

本研究では、社会的迷惑行為に対する認知と注意行動が、社会文化的規範によって異なることを示し、さらに韓国人日本語学習者の日本語学習経験が社会的迷惑行為に対する認知と注意行為にどう影響するのかを検証した。日本(J)・韓国(K)および韓国語を母語とする日本語学習者(KJ)を対象に、18場面の社会的迷惑行為に対する迷惑度と注意の有無を分析した。決定木分析の結果、迷惑度は注意の有無にかかわらず、 $J > KJ > K$ の順で高かった。また、KJの迷惑度がKとJの中間的な特徴を呈していることから、L2からL1への逆行転移の可能性が示された。さらに、KJの迷惑度を、注意の有無、日本語レベル、学習歴、日本滞在歴、日本人との接触頻度の4つの学習者属性を加えて重回帰分析を行った結果、有意な影響が認められたのは注意の有無と日本語レベルのみであった。

キーワード：日本語学習経験、社会的迷惑行為の認知、注意行為、韓国人日本語学習者

## The Influence of Japanese Learning Experience of Social Annoyance Recognition and Attention Behaviors

LIM Hyunjung (Yamaguchi Prefectural University) · TAMAOKA Katuso (Nagoya University)

This study investigated how recognition of and behavioral responses to social conventions depend on socio-cultural norms and how native Korean speakers were influenced by these factors through the experience of learning Japanese. Three groups participated: native Korean speakers learning Japanese in Japan (KJ), monolingual native Japanese speakers (J), and monolingual native Korean speakers (K). The groups were surveyed on the degree of conflict they experienced in 18 different scenarios of social conflict and on whether admonishments are appropriate in a particular scenario. The degree of conflict was analyzed using the decision tree analysis, which indicated a descending order:  $J > KJ > K$  regardless of whether an admonishment was made. Since the degree of conflict experienced by KJ exhibited intermediate characteristics of K and J, a 'reverse transfer' from L2 to L1 could have occurred. Furthermore, multiple regression analysis was done for KJ's conflict level according to four factors: (1) level of Japanese language ability, (2) length of Japanese learning, (3) length of stay in Japan, and (4) frequency of contact with native speakers of Japanese. The only factor which showed significant effects was the level of Japanese language ability.

**Key words** : Japanese learning experience, social annoyance recognition, behavioral responses, Korean learner of Japanese

## 1. はじめに

ある種の行為が迷惑だと認知され、それが迷惑であると判断される基準としては、その社会・文化に共通した意識の総体としての「社会的合意」が判断の前提となる(斎藤, 1999)。しかし、ある社会文化では迷惑だと思われることでも、他の社会文化では受け入れられる場合もある。したがって、社会的合意は個人の心理的な側面とともに、その個人が属する社会文化によっても異なってくるのが予想される。

習熟度の高い第2言語(L2)の学習者では、L2が使用される社会における「合意」が、逆に第1言語(L1)を使用する社会的合意に影響し、学習者のL1で獲得した社会文化的規範が変容することもある(Kecskâes & Papp, 2000)。これは逆行転移(reverse transfer)と呼ばれる。仮に、学習者に逆行転移が生じると仮定すれば、L1のみを話す人達と比べて、L2を頻繁に使用する人達はL2の学習過程を通してその社会文化的規範に接し、徐々にL2の社会文化的規範を受容していくのではないかと考えられる。

本稿では、社会的な迷惑場面に焦点をあてて、日本(J)・韓国(K)および韓国語を母語とする日本語学習者(KJ)を対象に迷惑行為の認知である迷惑度と注意行動に影響する背景諸要因を検討する。具体的には、迷惑行為に対する迷惑度と相手に注意を促すかどうか社会文化的に異なるKとJの2つのグループでどの程度異なるのか。また、日本人を基準とした場合、日本語を学習した経験が韓国人日本語学習者(KJ)の迷惑度と注意の有無にどのように影響するのかを明らかにする。これらについての分析を介して、「もし逆行転移が生じているなら、学習者のL1は自らのL2とL1母語話者との中間的な特徴を呈するはずである」(清水, 2009, p.193)という仮説を検証する。さらに、学習者の逆行転移が示される場合、学習者のどのような属性が逆行転移に影響しているのかを考察する。

## 2. 研究の方法

### 2.1 調査対象者

日本と韓国の大学に在学している大学生を対象に、社会的迷惑行為に関する質問紙調査を行った。その内訳としては、Jが41名(日本の山口県在住：女性40名、男性1名)、KJが41名(日本の山口県在住：女性25名、男性16名)、Kが50名(韓国のソウル市在住：女性17名、男性32名、無回答1名)の合計132名である。

### 2.2 社会的迷惑に関する質問項目

社会的迷惑は、主に公共場面で見られる迷惑行為を指し、行為者が自己の欲求充足を第1に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またその行為であると定義される(吉田ほか, 1999, 2009; 斎藤, 1999)。なんらかの被害を直接受けることがなくても、社会的な視点からみれば迷惑であると認知される場合、さらに何らかの不快な感情が伴う場合も含めた概念として用いられる。本稿もこの定義に従う。吉田ほか(1999)は、愛知県内の大学・短大に通学する大学生男女590名(男性271名、女性319名)を対象に、120種類の迷惑行為に対する認知調査(人々のふるまいを目にしたとき、どの程度迷惑だと感じるか)を行っている。因子分析の結果、社会的迷惑行為は「ルール・マナー違反行為」と「周りの人との調和を乱す行為」の2つの因子によって分けられることを報告している。本研究では、吉田ほか(1999)が示した迷惑行為120項目から日韓ともに日常生活でみられる状況であり、日韓の大学生にとって容易に想像できる「ルール・マナー違反行為」に当たる18項目の迷惑場面を選定した。本研究の質問紙では、迷惑行為を行う人を(1)韓国人(K)に対しては「同年齢の韓国人」とし、(2)日本人(J)に対しては「同年齢の日本人」とした。そして、(3)韓国人日本語学習者(KJ)に対しては「同年齢の日本人」とした。

仮に、KJが韓国的な社会的合意に基づいて日本人の迷惑行為を評価するとすれば、Kに近い判断をするであろう。しかし、日本語学習の経験が影響するとすればJに近い判断となると推測される。ま

た、迷惑行為者の性差の影響も指摘されているので(Tamaoka et al., 2010)、迷惑の行為者が男性か女性かについても質問項目において具体的に明示した。

表1は本調査で用いた18項目の場面の質問文である。18項目のうち、項目1から項目9までは吉田ほか(1999)の迷惑度指標で、5点のうち3.10点以上の項目であり、項目10から項目18までは3.10点以下の項目である。迷惑度の判断では18項目のそれぞれの場面に対して、吉田ほか(1999)と同様に、まず行為を迷惑と感ずるかどうかについて「とても迷惑(迷惑の知覚度:5)」から「全然迷惑でない(迷惑の知覚度:1)」までの5段階評定で回答を求めた。また、注意の有無についてはそれぞれの行為者に対して注意を促すかどうかを答えてもらった。

表1 迷惑場面に関する質問項目

No.	質問文
1	あなたは町を歩いています。人混みの中で、あなたの前にタバコを吸いながら歩いている男の人がいます。煙が後ろにいるあなたにまで届きます。
2	あなたは町を歩いています。路上に噛んだガムを捨てる女の人を見ました。
3	あなたは図書館で勉強しています。隣の机に座っている女の人たちが大きな声で話しています。
4	あなたは公園を散歩しています。散歩させている犬の糞の始末をしない男の人を見ました。
5	あなたは人通りの激しい町を歩いています。前の女の人たちがグループで横になって歩いています。あなたは急いでいますが、追い越すことができません。
6	あなたは鉄道の駅の待合室で待っています。煙の出ている吸殻を灰皿に放置する男の人を見ました。
7	あなたは電車に乗りました。疲れているので座りたいと思っています。しかし、混雑しているのに席をつめない女の人がいます。
8	あなたは自転車を止めています。すると、そこで、他人の自転車を倒したのに、そのままにしていこうとする男の人を見ました。
9	あなたはバスを待っています。長い列ができています。その列に横から割り込もうとしている男の人がいます。
10	あなたは講演を聞きに来ました。もう講演が始まっているのに、ドアを開けて大きな音を立てて入ってくる男の人がいます。
11	あなたは新生歓迎会に参加しています。あなたはお酒が飲めません。それでも、ある男の新生があなたに強引にお酒をすすめてきます。
12	あなたは授業に出席しています。教室で授業とは関係のないことを友達と話している女の人がいます。
13	あなたは電車に乗ろうとしています。乗降口付近に荷物を置いている男の人がいるので、乗るのに邪魔になります。
14	あなたは授業が行われている教室の外の廊下を静かに通っています。ところが、大声で話しながらそこを通る女の人たちがいます。

15	あなたはレストランで夕食を食べています。隣の席で大声で携帯電話で話している男の人がいます。
16	あなたはバイキング形式のレストランでアルバイトしています。ある女の人が食べきれないほどの料理を取って残して帰ろうとしています。
17	あなたは電車に乗っています。ある男の人はヘッドフォンで音楽を聴いています。でも、音漏れがしてまわりに大きな音が聞こえます。
18	あなたは授業に出席しています。隣の席で授業中に飲食をしている女の人がいます。

## 2.2 学習者の属性に関する項目

第2言語学習者の語用論的能力に関しては、外国語学習よりも第2言語学習の環境のほうが促進されやすいとされる(Kasper & Schmidt, 1996)。また、Takahashi (1996)は学習者が目標言語の社会とどのくらい接触しているのかという滞在期間も重要な要因であると指摘している。滞在期間と学習者の逆行転移の関係を調べた研究には鈴木(2013)がある。鈴木は中国人、日本人、そして日本滞在期間がそれぞれ異なる3グループの中国人日本語学習者を対象に断りのストラテジーを調査し、日本滞在期間が最も長い中国人日本語学習者に逆行転移がみられることを報告している。

本調査では、韓国人日本語学習者の属性の違いによる影響をより具体的に検証するため、①日本語レベル(テスト点数：0-24)、②日本語学習歴（1年未満から5年まで）、③日本滞在歴（1年未満から5年まで）、④日本人との接触頻度（1-2：1.ほぼ毎日、2.その他）を、KJの変数に加えることにした。なお、学習者の日本語能力を測定するテストについては早川ほか(2016)を用いた。このテストは、オリジナルは24問（その後、20問に改定された）からなり、分析では0点から24点までの連続変数とした。

## 2.3 分析方法

迷惑度に対する注意の有無と18場面、そして日本語学習経験の影響を総合的に検討するため、IBM SPSS 22 Statistics Base上で起動する決定木分析(Decision Trees)を用いて分析した。決定木分析の利点としては、ある言語行動の選択に影響しうる複数の要因から有意な要因を判定し、予測の強さと交互作用にしたがって樹形図を描いて結果を視覚的に示してくれることが挙げられる。樹木の上の方にある要因はより強い影響力を持ち、次のレベルには上の要因と最も交互作用の強い要因が選ばれ、枝を成長させていく。他の要因との交互作用がなければ枝は伸びない。決定木分析は各要因が持つ複数の条件のうち、傾向が同じものをグループ化するため、効果的な多変量解析の手法である。なお、この統計手法を使った先行研究には、日本人と韓国人の言葉遣いのポライトネス・ストラテジーに影響する諸要因を予測した林ほか(2010)や中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する諸要因を予測した玉岡・初(2013)および中国人日本語学習者の助言場面における意識と行動に影響する諸要因を予測した黄・玉岡(2015)などがある。

## 3. J・KJ・Kの迷惑度を予測する決定木分析

各言語グループの18の項目ごとの迷惑度、注意行為の有無および注意比率を表2に示した。なお、日本人の1名が第18場面に回答していなかったため欠損値とした。また、迷惑度と注意比率は平均(M)と標準偏差(SD)を加えた。グループ(J・K・JK)、注意(行動)の有無、迷惑場面の3つの独立変数で、従属変数の迷惑度を予測する決定木分析を行った。分析の結果は図1に樹形図で示した。まず、注意の有無が最も強く影響した $[F(1, 2373)=485.67, p<.001]$ 。注意をしない場合(M=3.04, SD=1.36)は、注意をした場合(M=4.43, SD=0.71)よりも、迷惑度に大きな差がみられた。当然のことながら、これは注意

するという行動を起こさせるのは、迷惑度が低い場合よりも高い場合であることを示している。

次にグループの違いが影響した。注意をしない場合 $[F(2, 1878)=390.24, p<.001]$ 、注意する場合 $[F(2, 491)=10.68, p<.001]$ ともに、3つのグループに有意な違いがあった。迷惑度は注意の有無にかかわらず、 $J > KJ > K$ の順に高くなった。具体的には、注意をしない条件では、 $J(M=3.84, SD=1.03) > KJ(M=3.42, SD=1.20) > K(M=2.17, SD=1.19)$ の順となり、注意する条件でも、 $J(M=4.61, SD=0.55) > KJ(M=4.42, SD=0.73) > K(M=4.23, SD=0.82)$ の同じ順になった。

また、注意をしない条件では、 $J[F(3, 569)=37.19, p<.001]$ と $KJ[F(3, 534)=31.87, p<.001]$ のグループに場面による違いが認められた。Kに有意な違いがみられなかったことは、注意をしない条件では、韓国人は迷惑度が場面に関係しないことを示している。一方、JとKには場面の影響はみられなかったものの、平均から考えてJのほうがKよりも迷惑度が高い場合に注意行動を起こすことが分かる。注意をする条件で、KJには場面の違いが影響した。図1に描かれているように、場面が2つに分かれた $[F(1, 198)=32.44, p<.001]$ 。

表2 韓国人、韓国人日本語学習者、日本人の迷惑度と注意有無の比率

迷惑場面	韓国人(n=50)				韓国人日本語学習者(n=41)				日本人(n=41)			
	注意の有無		注意比率	迷惑度	注意の有無		注意比率	迷惑度	注意の有無		注意比率	
	迷惑度	有			無	迷惑度			有	無		迷惑度
1	3.32	9	37	0.20	4.24	5	36	0.12	4.41	0	41	0.00
2	2.04	2	48	0.04	3.39	4	37	0.10	4.10	0	41	0.00
3	3.48	24	26	0.48	4.66	32	9	0.78	4.66	16	25	0.39
4	2.46	9	41	0.18	4.20	16	25	0.39	4.02	9	32	0.22
5	2.39	16	34	0.32	3.90	26	15	0.63	4.59	27	13	0.68
6	2.61	44	5	0.90	3.71	3	38	0.07	3.80	6	35	0.15
7	1.81	1	48	0.02	2.88	5	36	0.12	3.98	11	30	0.27
8	2.04	6	44	0.12	3.83	10	31	0.24	4.15	10	31	0.24
9	2.94	18	32	0.36	4.39	21	20	0.51	4.49	14	27	0.34
10	2.41	3	47	0.06	4.00	6	35	0.15	4.10	2	39	0.05
11	2.57	6	42	0.13	4.20	27	14	0.66	4.34	27	14	0.66
12	2.34	4	46	0.08	3.49	13	28	0.32	3.76	3	38	0.07
13	2.05	5	44	0.10	3.29	11	30	0.27	4.32	17	23	0.43
14	2.21	3	47	0.06	3.46	7	34	0.17	3.66	7	33	0.18
15	2.34	4	46	0.08	3.20	7	34	0.17	3.56	2	38	0.05
16	2.22	4	45	0.08	3.07	7	34	0.17	3.39	7	34	0.17
17	2.18	2	48	0.04	3.17	2	39	0.05	3.76	3	38	0.07
18	2.54	7	43	0.14	3.27	10	31	0.24	3.03	4	36	0.10
M	2.44			0.19	3.69			0.29	4.01			0.23
SD	0.44			0.22	0.51			0.22	0.44			0.20

注. Missing データは除外

#### 4. KJの迷惑度に及ぼす要因に関する重回帰分析

KJの迷惑度が、KとJとの中間に位置することが観察されたことを受け、日本語学習者の属性がKJの迷惑度に与える影響を検討してみた。具体的には、KJの迷惑度を、注意の有無、日本語レベル、学習歴、日本滞在歴、日本人との接触頻度の5つの学習者属性を加えて重回帰分析を行った。各変数の平均、標準偏差とそれらの相関係数は表3に、重回帰分析の結果は表4に示した。ステップワイズ法による重回帰分析の結果( $R^2=0.156$ )、本調査におけるKJの迷惑度に有意に影響した変数は、注意の有無( $\beta=0.389, p<.001$ )と日本語レベル( $\beta=0.078, p<.05$ )のみであった。Takahashi(1996)と鈴木(2013)が報告した学習者の日本滞在歴の長さの影響はみられなかった。また、学習者の日本人との接触頻度、そして日本語学習歴の影響もみられなかった。

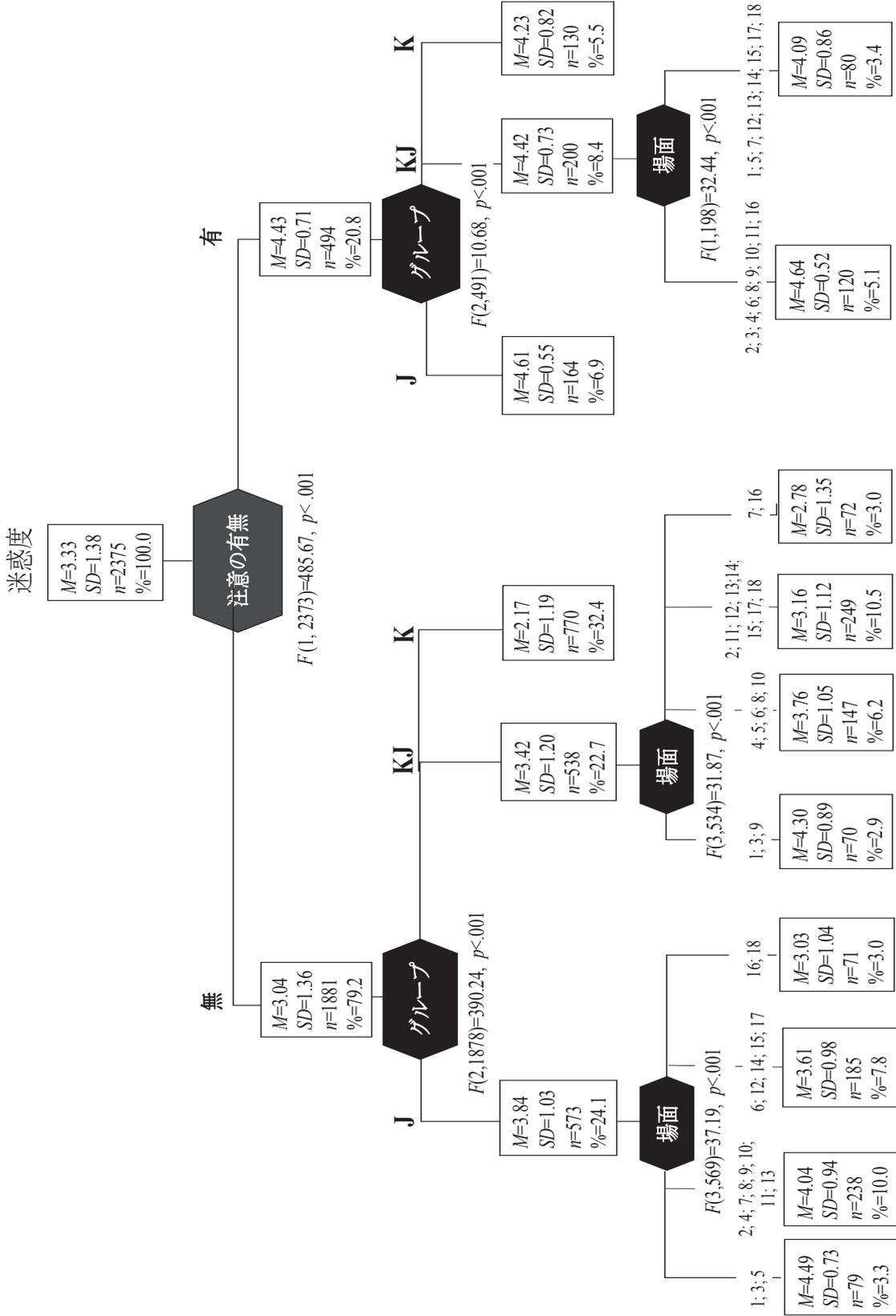


図1 J・KJ・Kの迷惑度を予測する決定木分析

表3 各変数の基礎統計量と相関係数

#	1	2	3	4	5	6
1 迷惑度	-					
2 注意有無数値	.387 ***	-				
3 日本語レベル	.067 *	-.028	-			
4 日本語学習歴	-.006	-.095 **	.444 ***	-		
5 日本滞在歴	.034	-.025	.422 ***	.597 ***	-	
6 日本人との接触頻度	-.017	-.023	-.098 **	-.108 **	-.050	-
平均値	3.66	.28	16.30	2.84	2.00	1.27
標準偏差	1.19	.45	4.98	1.35	1.21	.444

注：N=666, \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表4 KJの迷惑度を従属変数とする重回帰分析の結果

変数名	$\beta$	t 値	有意確率
注意有無数値	0.389	10.891	$p<.001$
日本語レベル	0.078	2.190	$p<.05$
決定係数	$R^2=.156$		

注：重回帰分析はステップワイズ法。N=666。βは標準偏回帰係数。

## 5. おわりに

本研究では、日本(J)・韓国(K)および韓国語を母語とする日本語学習者(KJ)を対象に、迷惑行為の認知である迷惑度と注意行動に影響する背景諸要因、特に社会的迷惑行為の認知と注意行動に対する韓国人の日本語学習経験による逆行転移を中心に検討を行った。分析の結果は、以下の5つに要約されよう。

第1に、図1の決定木分析の樹形図から分かるように迷惑行為に対する迷惑度に最も強く影響したのは注意を促すかどうかであった。迷惑であると強く感じられ、あるレベルを超えた時に行動を起こすことを示している。注意をするという行動を起こすには、それぞれのグループである一定の高い迷惑度の閾値(threshold)があるのではないと思われる。注意行動を起こす閾値を平均から考えて、日本人(M=4.61)のほうが韓国人(M=4.23)よりも高いことが分かる。つまり、日本人のほうが韓国人よりも迷惑であると感じる度合いが高い場合に、注意行動を起こすといえよう。言い換えれば、日本人のほうが韓国人より忍耐強く、また面と向かって批判することを避ける傾向が強いともいえそうである。

第2に、注意する・注意しない両条件ともに、日本人の迷惑度が韓国人の迷惑度よりも高く、韓国人日本語学習者は両者の間に入った。清水(2009)が指摘したように、韓国人が日本語を学習することで母語の韓国語とL2の日本語の中間的な特徴を呈した。これは韓国人が日本語を学習することによって迷惑行為に対してより敏感に認知し、韓国人から日本人へと近づいていったからだと考えられ、逆行転移(Keckskâes & Papp, 2000)がここで観察されたといえよう。

第3に、注意をしない条件では日本人と日本語を学習した韓国人のグループに場面による違いがみられた。しかし、韓国人には場面による違いはみられなかった。これは、韓国人が注意を促す場合は、場面に関係ないことを示している。このような違いも日本語学習の経験が迷惑度に影響していることを示していると推測される。

第4に、注意をする場合、日本語を学習している韓国人には、場面による違いが影響した。図1に描いたように、2・3・4・6などの場面の平均(M=4.64)は韓国人(M=4.23)より日本人(M=4.61)に近く、もう一方の1・5・7・12などの場面の平均(M=4.09)は日本人(M=4.64)より韓国人(M=4.23)に近かった。

これは韓国人日本語学習者が韓国と日本の2つの異なる社会的合意を持ち合わせており、それらが適用される際に、注意行動を起こす基準が場面によって違って来るからでないかと思われる。

第5に、第2言語学習者の語用論的能力向上のためには、長くL2環境で滞在したほうが有利であり、日本滞在経験の長い学習者がより母語話者に近い言語行動をとることが報告されている(Takahashi, 1996; 鈴木, 2013)。しかしながら、本調査ではL2の社会・文化的受容に強い因果関係となったのは日本滞在期間、学習歴、接触頻度ではなく、日本語レベルであることが示された。この結果は、学習者の滞在期間と学習期間の長さや接触頻度よりも、目標言語の知識そのものがL2の社会・文化的規範の受容を決める要因になることを示唆する。

本研究では、日韓では社会的な迷惑行為に対する社会的合意に違いがあること、また韓国人日本語学習者の迷惑行為に対する認知や注意行動が、日本語を学習することによって逆行転移が起こりえる。つまり、日本的な社会・文化的規範へと変容している可能性があることを示すことができた。ただし、L2から母語のL1への逆行転移の現象をより明確に把握するためには学習者のL1場面とL2場面での使用に差があるかどうかについても比較検証する必要があるだろう。また、今回は性差の偏りがあったため、被験者の男女差の影響については分析を行っていないが、性差の要因が結果にどのように影響しているのかについても検討が必要であろう。これについては今後の課題としたい。

## 謝 辞

本研究は、JSPS科研費 JP15K12879の助成を受けたものです。

## 【参考文献】

- 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞 (2010)「丁寧度判定で測定したボライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析」『日本文化學報』47, 101-115.
- 黄郁蕾・玉岡賀津雄 (2015)「中国人日本語学習者の助言場面における意識と行動に影響する諸要因」『言語文化と日本語教育』48/49合併号, 11-21.
- 斎藤和志 (1999)「社会的迷惑行為と社会を考慮すること」『愛知淑徳大学論集』24, 67-77.
- 清水崇文 (2009)『中間言語語用論概論』スリーエーネットワーク.
- 鈴木恵理子 (2013)「中国人日本語学習者の逆行転移－日本滞在期間に注目して－」『秋田大学国際交流センター紀要』2, 3-18.
- 玉岡賀津雄・初相娟 (2013)「中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する要因」影山太郎 (編)『複合動詞研究の最先端－謎の解明に向けて』(pp. 413 - 430), ひつじ書房.
- 早川杏子・魏志珍・初相娟・玉岡賀津雄 (2016)「中国語および韓国語を母語とする日本語学習者のデータを基にした日本語聴解能力テストの開発と評価」『関西学院大学日本語教育センター紀要』5, 31-45.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999)「社会的迷惑に関する研究 (1)」『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科』46, 53-73.
- 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆 (編) (2009)『社会的迷惑の心理学』ナカニシヤ出版.
- Kasper, G., & Schmidt, R. (1996). Development issues in interlanguage pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 149-169.
- Keckskâes, I., and Papp, T. (2000). *Foreign Language and Mother Tongue*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Takahashi, S. (1996). Pragmatic transferability. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 189-223.
- Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2010). Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*, 20, 23-45.